

幼児期の保健・体育における研究課題

小野 勝

わたしたちが、幼児の保健・体育の指導をしているさいに、ときどき、あんなことをするよりもこうした方がよいのではないかしらと思うことがある。しかし、思いきって変えるにはそれ相当の理由がなければならぬが、それがないために、つい、そのままにして過してしまふ。

こういうことがかなり多くあることの原因の一つとして、この方面の学問がまだ新しく、じゅうぶん研究しつくされていないことがあげられるのであろう。

わたしたちは、研究というとすぐ大変なことを考えてしりごみしてしまふきらいがある。しかし、保育の方面の学問のように、まだ、黎明期にあるものにとってはあらゆるものが研究課題になり得るものであって、わたしたちがもつ素朴な疑問も、大切に取り扱って育てていく必要がある。こういう観点から、中にはつまらぬもの

があるかもしれないが、幼児期の保健・体育における研究課題をつぎにあげることにする。

一、スポーツはいつごろからはじめたらよいか。

現在、多くの幼稚園では、スポーツを競技としてやっていないようである。しかし、スポーツに強くなるためには、できるだけ早い時期から始めた方がよい。

たとえば、水泳に強くなるために、極端な例かもしれないが、満二才くらいからこどもを水の中へ入れて、泳ぐ訓練をしている人がある。また、ある幼稚園では、競争するスポーツとして水泳をとりいれているところもある。スキー、スケート、バレエなどにいたっては、かなり小さいときから始めているようである。

しかし、スポーツによる障害は、そのスポーツが適していないときには、年令が若いほど大きいということを考えねばならない。身

体をじょうぶにするためのスポーツと、競技者として、勝敗を重視するスポーツとは自らががつてくるが、いずれにしても障害をさける必要があることはいうまでもない。

では、身体に取りかえしのつかない障害を残さないで、しかも記録をあげるにはどうしたらよいか。

いろいろの研究の結果、競争としてのスポーツは、小学校になつて始めた方がよいといわれている。しかし、これもじゅうぶん研究された結果ではないのであつて、スポーツによっては、もっと早くから始めてもよいかもしれない。

一、ゲームのとき、勝負をはっきりさせた方がよいであろうか。

幼稚園でゲームをするときに、はじめから勝負がきまつているようなクラス分けをするのはよくない。たとえば、男の組と女の組とわけて、競争をさせるようなことはよくない。では、幼稚園ではゲームのさいには、いつも勝負をはっきりさせた方がよいであろうか。わたくしは、これについては必ずしもそのようには思わない。

というのは、中学、高校になつて体育ぎらいになることもあるが、この原因の一つとして、幼稚園時代から負けるといふことをあまりにもはっきり認識させられ、スポーツに対し劣等感をもつようになったことがあげられるように思われる。しかし、幼稚園でゲームのさいに勝負をはっきり認識させなかつたら、こどもたちはゲームに興味をもたなくなるであらう。現在のところ個人対個人の競争で

は、あまり勝負をはっきりさせないで、集団対集団のときにはっきり認識させたらどうであろうか。

一、反応をはやめる訓練はどのようにしたらよいであろうか。

物をみたり、音を聞いたりして、それに対し身体を反応させる。この時間を反応時間という。こどもの反応時間はおとなに比べて、かなり長い。おとなの中でも、敏しょうに動作しなければならぬようなスポーツの選手は、普通の人よりも短い。たとえば、短距離の選手はマラソンの選手よりも反応時間は短いし、一般の人と比べるとはるかに短い。最近、このことに注目して、こどもの反応時間を早くする試みが行なわれている。

ある幼稚園では、笛を吹くことによつて、先生の方を向かせる訓練をすると、次第に早くできるよふになるという報告がある。しかし、このような方法では、はじめのうちは興味をもつてやるであらうが、まもなくいやになるであらう。また、笛の音がこどもに対しストレスになることも考えられる。

そこで、このような訓練と同じよふな効果をもつ方法として球技はどうであらうか。もつとも、こどもの発達に即した球技を選ぶことはいふまでもない。

一、左ききはそのまゝにしておいてよいであろうか。

こどもは、発育の途中に、左ききになったりすることもあつて、結局、大多数のこどもは、そのままにしておいても右ききになる。

しかし、少数のこどもは左ききのままで成長する。このこどもに對して無理に右ききにしようとすると、どもったりすることがあるので、そのようなことがないように、わたしたちは、右ききであつても左ききであつても、どちらでもよいんだという考え方で、指導している。では、はたしてそのような指導で問題はなからうか。

ある幼稚園で聞いたことであるが、毎年新学期になると、左ききのこどもの中に凶工の時間に鋏を使うのをいやがるこどもがいて困るとのことである。この場合、左ききの用の鋏があれば問題はないが、今はつくられていない。また、たとえ鋏が、左きき用につくられたとしても、他の日常用品すべて、右きき用と、両用がつくられるというわけにはいかない。

長い間にできた慣習によつて、わたしたちの周囲のものは、右ききに便利なものになつてゐる。したがつて、もし無理を生ずることがなければ、左ききのこどもに對して、どちらでもよいんだという考え方をさらに発展させて両方が使えるように指導したらどうであらうか。

しかし、ここでとくに注意しなければならないのは手の運動と言語の発達についての相関関係である。現在のところ、まだ、はつきりはしていないが、このことについて、さらに研究の必要があるように思う。

一、基本的な生活習慣形成の指導は、今のままでよいであらうか。

わたしたちは、こどもに、基本的な生活習慣をつけさせるために、まず、感覺的な面から入つて知的な面へと發展するように指導している。たとえば、二才くらいから、手がよごれたら、冬ならば、あたたかい湯でぬらしたタオルで、夏ならば、つめたい水でぬらしたタオルでふいてやる。手をふくことは気持ちがいいということからはじめて、すすんで、ふくことを要求するようになったら、手をふいたよごれたタオルをみせて、きたないということが分るようになっていく。このような指導のしかたで幼稚園のこどもはいわれなくても手を洗うようになる。しかし、小学生・中学生と、おとなになるにつれてこの習慣はくずれていく。

この原因の一つとして、手を洗つた効果がすぐに、はつきりとはあらわれないことがあげられる。また、もう一つの原因として抵抗力のことがあげられる。一般に、清潔にあまり関心のないこどもの方が、かえつて、じょうぶであることが多い。

これはわたしたちの身体は、発病しない程度の細菌が入つた方が免疫力ができるためである。したがつて、伝染病の流行していないときに、便所に消毒薬をおくことはいきすぎではないだろうか。どの程度に清潔にしたらよいかということをしめることはきわめてむずかしい。清潔であることと、こどもらしく活発に遊ぶということをどのあたりで調和させたらよいであらうか。